

特別奇稿

東京外大教授 中嶋 嶺雄

ソ連からの最高指導者の来日は史上初の出来事だというのに、どうもそのタイミングは日ソ双方にとってもあまりにも悪い。ソ連側は内政上の混乱でゴルバチョフ大統領の指導権が揺らぎつつあり、日本側は、指導力なき首相のもとで、政府・与党は都知事選にまつわる幹事交代劇のドタバタにみまわれた。

深刻なソ連の国内事情

しかし、ゴルバチョフ大統領は、予定通り十六日に来日するのである。ゴルバチョフ大統領にとっては、一連の政治危機はもとより、経済の不振、科学技術の立ち遅れといった国内事情が深刻であればある程日ソ関係の打開が必要である。この点は改革派、保守派を問わず一致しているとみてよいからである。それだけに、今回の訪日ソ連にとって、決して不満足な結果にならないよう、また、日本国民に後ろ指を指さ



れることにならないよう、周到に外交戦略を練り直し、十分な対日布陣を整えて来日するに違いない。過般の小沢一郎前自民党幹事長の

日ソの将来 見据えた交渉

簡単でない「領土」解決

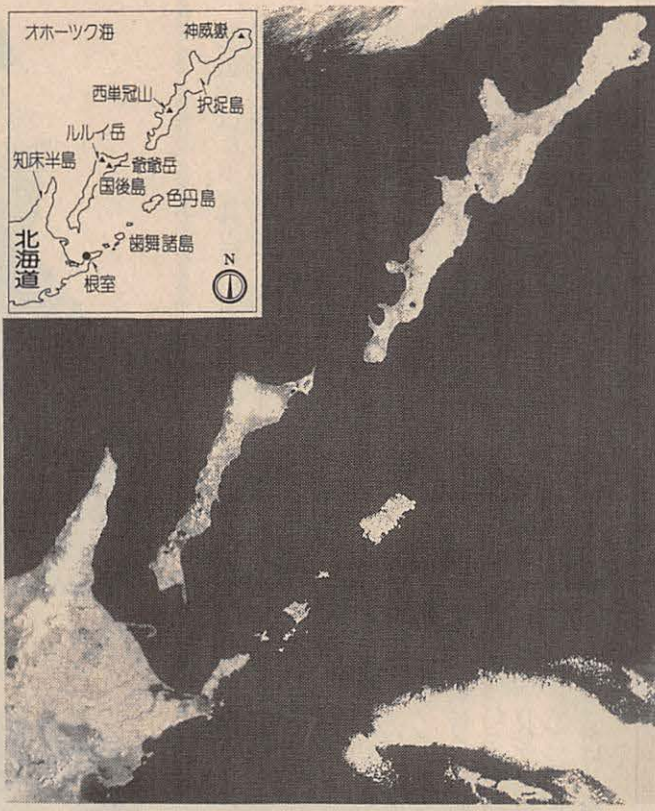
二度にわたる会見要請で日ソ外交の当面の議題がどこにあるのかを十分承知したはずのゴルバチョフ大統領としては、焦点の北方領土問題だけ

理、アジア太平洋地域での安全保障システムの形成、環日本海経済圏構築など、対日ゴルバチョフ提案に含まれる可能性が大きい。

北方領土問題では、いまゴルバチョフ大統領と対立しているエリツィン麾下のロシア共和国の外相を訪日代表団に加えたことに示唆されるように、日本側の主張する四島一括返

なる。

しかも先月の小沢訪ソに見られたように、北方領土返還と引きかえに三百億米ドル近い巨額の経済援助をちらつかせることなどは、ソ連国民の感情を傷つけるばかりでなく、ソ連国内の当面の難しい内政状況を食いついて、日本側の果敢だけを食べ逃げされることになるかもしれない。



還には応じられないことを強調するだろう。かわって日ソ共同宣言(一九五六年)に基づく二島返還を一気に提案してくるかもしれない。そのような多元的でさまざまな問題を織りまぜたダイナミックな外交政策に対して、日本側が問題をもっぱら北方領土一括返還もしくは四島の主権承認に限定して対応するならば、逆に日本側が自ら首を絞めることにも

ペレストロイカが思わぬ苦境に陥っている今日のソ連は、北方領土を管轄するロシア共和国が改革派のエリツィン議長を共和国大統領に立てて連邦と対立してゆく可能性さえ見せている昨今である。そのエリツィン議長は世論を常に気にかける大衆政治家であり、領土問題では極めてナシヨナリスティックな国粋派だといえよう。だから、エリツィン氏が

国内政治では急進改革派だからといっても、北方領土問題では決して柔軟ではないことを知らねばなるまい。この点では、国際政治の現場を数多く踏んでいるゴルバチョフ大統領の方がはるかに国際派だと思われるだけに、日本側はこの機会に、せめて北方領土問題を今後の外交交渉に委ねて今世紀中には解決するといった約束を取りつける必要がある。もとより、領土問題以外にも、より広範な展望のなかで日ソ関係の打開に努めるべきことはいままでもない。

==自由経済の活力==

ゴルバチョフ大統領の滞日は、わずか四日間と短い。本当は危なっかしい海部首相との首脳会談よりも、日本社会のさまざまな現場をじっくり見てもらい、東アジアの自由経済体制がいかに効率よく活力に充ちているかを知ってもらうことの方が大切だと思う。なぜなら、東アジアの自由経済体制の国を訪れるのはゴルバチョフ大統領にとって初めてのことであり、その結果は、エリツィン氏が昨年初頭の訪日後、ソ連共産党を脱党してすっかり、改宗したように、ゴルバチョフ大統領自身とソ連の将来にとってきわめて大きなインパクトを与えるであろうからである。

【写真】北方領土の解決なくして、戦後が終わらない日ソ地球観測衛星「ランドサット」5号から見た北方四島